

Title	音楽の欠片1 開演前
Author(s)	河口, 篤
Citation	a+a 美学研究. 2018, 12, p. 152-152
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/90119">https://doi.org/10.18910/90119</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University



エッセイ

音楽の欠片 1

## 開演前

河口 篤

開演前のコンサート会場では、時折、舞台上で楽団員が音出しをしていることがある。

耳を傾けると、様々な音が複雑に混じり合い、独特の音世界を作り出している。

客席のざわめきを背景に、ホルンが唸り、クラリネットが軽快に飛び回り、その横で、バイオリンが低音域を力強く進み行く。

本来ならば起り得ない組み合わせ。あのフレーズとこのフレーズがかち合うと、こんな響きがするのかもしれない新鮮な驚き。既知の素材から、未だ聴いたことのない無限の可能性を垣間見る瞬間。

ワイン片手に談笑する人たちは、この豊饒な経験をふいにしているのだ。

彼らはただ、既知っている「音楽」を聴きに来ただけで、本当の音楽的経験を、未知の音との出会いを求めて、やって来たのではないのだ。

そう思うのは、しかし、無秩序な感覚的快に耽溺する、単なるデカダンなのだろうか。

指揮棒が降り下ろされた時、そこに漂っていた無限の可能性は消え失せ、一個の作品として定まった形をなす。

そのことに一抹の寂しさを覚え、はて、何を聴きに来たのだったか。

## 美学は言葉を考える

高安啓介

哲学の一分野としての美学はもとより感性学であるとはいえず、美学の仕事はじつさいには言葉について吟味する仕事だったのでと思わせるところがあります。美をめぐる議論はじつところ美という語をどう理解したらよいのかという議論だったのではなかつたかと。美学はたしかに意識哲学の文脈のなかで育まりましたが、言語中心に考えてみたい理由は、私の場合とてもプラグマティックです。学生の皆さんは学んだ美学をどう生かせるのでしょうか。一つ考えられるのは、コミュニケーションの媒体となる言葉の理解をとおして、研究者・芸術家・生活者のあいだの相互理解をうながす役割を果たせるようになることです。たとえば、次のように問うてみましょう。自然の美とはそれほど自明なのか。アートは芸術と同じなのか。人間はそもそも何かを創造できるのか。カワイイとはどういう状態なのか。以上のような問いは、結局のところ、言葉の使用にかかわる問いであると考えられます。美学のこうした言葉の吟味によって、異なる立場の人々が少しでも理解し合えるようになり、多くの人々が共通の議論に参加したり、多くの人々が共通の活動に参加したり、参加の可能性が増すならば、美学がけっこう役に立っているといえます。あたりまえと思っっている言葉こそ、語源にさかのぼって本当の意味を知ったり、含まれる意味どうしの矛盾に気づいたり、状況に応じた意味の違いを明らかにできたとき、あたりまえがあたりまえでなくなる。そしてそのようにして、新たな議論へとみちびかれ、新たな行動へとつながられ、気づかぬうちに新たな次元に立たされる。これこそ美学のユートピアではないでしょうか。